

東海の古代

第250号 2021年6月

会長 : 竹内 強
 編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp
 HP : http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm

出雲神話と史実の狭間

—宮市 畑田 寿—

出雲は多彩な神話に彩られた国であるが、一方、日本列島での最古の文化を持った国でもある。しかし、神話がどこまで史実なのか、いつの時代の話なのかが明確でない。今回はそれらを遺跡と組み合わせて眺めてみたい。

1 『古事記』にみる出雲神話

出雲神話は『古事記』、『日本書紀』、『出雲国風土記』などに断片的に語られているがその中で最も記述の多い『古事記』では最初の国引き部分を除くと次のような話の展開になっている。

項目	事柄	場所	関係者
須佐之男の大蛇退治	八俣遠呂智を退治	斐伊川	櫛名田比売
稲羽の白兔	大国主は赤裸の兔を助けた縁で八上比賣と結婚	気多(因幡)	八上比賣
八十神の迫害	怒った八十神は大国主を迫害	木の国に逃げる	大屋毘古神
根の国の訪問	須佐之男が大国主に試練を与えるが最後に弓矢を与える	根の国 宇迦の山(神殿)	須勢理毘売
沼河比売求婚	沼河比売を妃とするが須勢理毘売が嫉妬	高志国	沼河比売
大国主の神裔	西は九州胸型から東は北陸若狭付近までの豪族の娘を妃とする	山陰一円	
国造り	少名毘古那神と二人で国造りを実施 案山子の神(農業神)を三輪山に祭る	美保 三輪山(大和)	少名毘古那神
大年神の神裔	更に勢力を四国、滋賀に拡大		
大国主の国譲り	天照は建御雷神らを送り大国主に国譲りを迫り、神殿建設を条件に決着	多芸志の少浜	
天孫降臨	ニニギ命が笠紫の日向に降臨	九州高千穂	

2 出雲地方の遺跡の概要

一方、山川出版社発行の県史シリーズの中から島根県（2010出版）と鳥取県（2015出版）の歴史を参考にして、発掘された遺跡から当時の状況を推察してみると次の表になる。

時代	記述年代	島根での出来事	鳥取での出来事
弥生中期	BC 3 ~ BC 1	出雲大社遺跡群、四絡遺跡群など大規模な環濠集落発生	
		銅鐸、銅剣、銅矛など銅製品が使われる	
		四隅突出型墳丘墓や方形墓が造られ始める（友田遺跡）	墓は土壙墓が中心 妻木晩田遺跡が始まる
		出雲平野の8か所で村集落群が形成される	目久美遺跡（前期）が洪水により隣の池ノ内遺跡に移転
弥生後期	AD 1	青銅器祭祀が衰退する 土砂が堆積し神門水海が形成される	四隅突出型墳丘墓が各地で造られる（阿弥大寺遺跡）
		集落がさらに集約されクニが形成される	
	AD 2	鉄器が普及する	
王一族が四隅突出型墳丘墓に葬られる 出雲と吉備、北陸などとの交流が盛んになる（西谷3号墳）		妻木晩田遺跡が最盛期を迎える	
弥生終期	AD 3	出雲最大の四隅突出型墳丘墓（西谷9号墳）が造られる。景初3年銅鏡（安来）	
		花仙山で碧玉製の玉作りが始まる	妻木晩田遺跡が終焉
古墳前期	AD 4	大型方墳に代わる	村の規模が最大化する（長瀬高浜遺跡）
		前方後方墳が造られ始める	
		前方後円墳が造られ始める	
古墳中期	AD 5	大型古墳の出現	
	AD 6	出雲東部で前方後円墳が造られ、西部で前方後方墳が造られる（山代二子塚）	
		東部と西部の2大勢力が確立する	因幡付近の独自の横穴式石室
		鉄の生産の開始？	
終期	AD 7	山代方墳被葬者による出雲の統一	
	659年	（斉明5）杵築大社建立	

- ① 弥生前期頃には斐伊川流域を中心に稲作が始まる。九州の菜畑遺跡の稲作はBC10世紀とする説が有力であるが、普及時期をBC5～4世紀とすると出雲での稲作の開始はほぼ同じ時期であった。
- ② 弥生中期になると集落が形成されるようになる。九州では吉武高木遺跡の時代に相当する。銅製品は九州では朝鮮半島形式の銅矛が中心であるが、出雲では銅剣や銅鐸が造られた。

- ③ 弥生後期になると銅器の代わりに鉄器が使われるようになり、集落が東に拡大するとともに九州、吉備、北陸との交流が盛んになる。
- ④ 古墳時代に入ると勢力が東西に2分化集約され、前方後円墳と前方後方墳が造られるようになり、ヤマト王権の影響がみられるようになる。

3 四隅突出型墳丘墓の変遷

鳥取県埋蔵文化財センターに依ると四隅突出型墳丘墓は次の変遷を経たとしている。

- ① 弥生中期後半 (BC1) 江の川の中流域 (三次) で誕生。
- ② 弥生後期 (AD1) 日野川を下り妻木晩田遺跡で造られるようになる。
- ③ 弥生後期後半 (AD2) 出雲地方に進出するとともに北陸各地で造られる。
- ④ 古墳時代 消滅する。

北九州では銅矛が、近畿・東海では突線紐式銅鐸が盛んに造られていた弥生後期、出雲では銅剣や銅鐸が埋設され、代わって四隅突出型墳丘墓が造られるようになる。新しい祭祀方式が全国に先駆けて採用されたと思われる。

4 妻木晩田遺跡の存在

出雲の東の大山の北側山麓に展開する妻木晩田遺跡は、九州の吉野が里遺跡の3倍以上の規模を誇り、竪穴式住宅400棟、堀立柱建物500棟、墳丘墓34基が発掘されている。構築時期は弥生中期に始まり後期に最盛期を迎えるが3世紀中頃に突然姿を消す。特徴は鉄器の普及で農機具にも使われており、様式は大陸性を伺わせるものが多い。このことから出雲においても独立した勢力であった可能性が高い。

5 前方後方墳と出雲王権の存在時期

BC1世紀頃から出雲独自の四隅突出型古墳が造られ始め、2世紀末の西谷遺跡で出雲王権の確立が伺われるが、4世紀に入ると方墳のほかに前方後方墳が造られ始め、その後、前方後円墳が造られるようになり、通説ではヤマト王権の支配が及んだとされている。しかし、6世紀後半に出雲西部の山代二子塚古墳などで再び前方後方墳が造られる。前方後方墳の存在をヤマトと一線を画す勢力の存在と見れば、出雲王権は6世紀後半まで続き、斉明5年(659年)の杵築大社修造の詔で終焉を迎えたことになる。

6 斉明5年の日本書紀の記述

『日本書紀』の斉明5年には不思議な記述がある。

「この年、出雲国造に命ぜられて神の宮(意宇郡の熊野大社)を修造させられた。そのとき狐が意宇郡の役夫の採ってきた葛(宮造りの材料)を噛み切って逃げた。また犬が死人の腕を揖屋神社のところに齧って置いて行った。一天子の崩御の前兆である。」(『日本書紀』宇治谷孟訳、講談社学術文庫)

この記事にある熊野大社や揖屋神社はいずれも出雲東部(松江市の南東)にあたる。この時期に出雲の西の杵築に宮を移設して出雲の統一を図ったと考えられる。この記事の本意は「出雲の神々が祭られている場所にも神威が及ばなくなり、出雲王権の終焉を象徴している。」であろう。

7 まとめ

出雲神話では「最初に出雲の国があり、出雲の国の国譲りが解決した後に、ニニギ命が天孫降臨して九州倭国やヤマトの国が造られた。」としているが、遺跡からは次のことが言える。

- ① 全国各地に弥生集落が登場する1世紀頃には出雲では斐伊川沿岸に弥生集落が造られて独自の文化が広まった。
- ② 天候の悪化により九州で倭国騒乱が起こる2世紀後半には、斐伊川周辺の集落は終焉を迎えるが、高台にあった妻木晩田遺跡などは残るとともに、九州と人の動きが活発になる。
- ③ 3世紀に入ると九州に卑弥呼が登場して騒乱が収まるが、出雲では四方突出型墳墓による新しい秩序が生まれた。神話では大国主の時代にあたると考えられる。
- ④ 3世紀後半にヤマトでは纏向遺跡を中心にヤマト政権が誕生する。この時、出雲の勢力はヤマトに進出して三輪山付近に拠点を設けていた。
- ⑤ 4世紀に入ると東海を中心とした前方後方墳、ヤマトと関連の深い前方後円墳が造られるようになる。これらの勢力が顕著になるのは6世紀まで掛かり、『日本書紀』が記述するヤマトの進出とは2百年程度誤差がある。
- ⑥ ヤマトの支配の証拠は岡田山古墳（6世紀、松江市）の鉄剣の銘「各（額）田部臣」が最初であり、斉明5年（659年）に出雲王朝は完全に終焉した。

5世紀に瀬戸内海交易ルートが開かれるまで、九州北部から日本海沿岸沿いに進み、出雲に達した後、播磨を経て大和や尾張を経る交易ルートが中心であった。朝鮮半島から来た渡来人は新天地を求めてこのルートを進んだと思われる。しかし、日本海側は纏まった平地が少ないため九州のように色々な種族が入り交じった文化を形成せず、単一種族の文化が形成された。妻木晩田遺跡や青谷上寺遺跡のように近隣と違う集落の存在がこれを示している。

祭祀の変遷を眺めると、最初に青銅器に拠る祭祀が1世紀頃まで続き、次に首長墳墓による祭祀が続く。最後に靈魂観念を具象化した神祇祭祀となる。いずれもヤマトに先駆けて登場しており、精神面でも先進国であった。

出雲と筑紫

名古屋市 石田 泉城

『古事記』では、天照大御神と須佐之男命の誓約の段で、天照大御神（アマテラス）が須佐之男命（スサノオ）の持つ剣を譲り受けて多紀理毘賣命（タギリヒメ）を始め宗像三女神を生みます。またスサノオは、アマテラスの玉をとり天之忍穂耳命を始め五柱の男神を生みます。このあとスサノオは、アマテラスのいる高天原・葦岐から追放されて出雲へ進出します。

そして、この宗像三女神は、「**此三柱神者、胸形君等之以伊都久三前大神者也**」とあって宗像氏が祭祀する神です。また、タギリヒメは、「**故、此大國主神、娶坐胸形奥津宮神・多紀理毘賣命**」とあって、須佐之男命を祖とする大國主神と婚姻関係にあります。

つまり、タギリヒメは、須佐之男命の子であるとともに、出雲の神である大國主神の後でもあるわけです。したがって、タギリヒメは、出雲に二重に関わっており、出雲と宗像は神話において密接な繋がりがあると考えられます。

『日本書紀』崇神天皇六十年には、崇神が出雲大神の神宝を見たいとして武諸隅が出雲へ遣わされたときには「**當是時、出雲臣之遠祖出雲振根、主于神寶、是往筑紫國而不遇矣**」とあって、出雲の支配者であった出雲振根は、筑紫へ出かけて留守であったと記されています。大和からの圧力がある中で出雲振根が筑紫へ出かけていたのは、大和への対抗の協議のためと理解できます。

タギリヒメの姉妹の名が市杵嶋（杵岐）姫であることも、杵岐を要に対馬海流圏が筑紫から出雲の海人の共通の勢力圏域であったことを支持しています。

これらのことは、出雲と筑紫との関係が大和に対して政治的な連合関係にあったことをうかがわせます。逆に言えば、大和側の言い分を以てしても、4世紀の天皇とされる崇神天皇の時代、崇神紀六十年には、出雲も筑紫も大和の勢力圏外であったのです。

稲荷山古墳出土鉄剣銘文の氏族について

東海市 大島 秀雄

1. はじめに

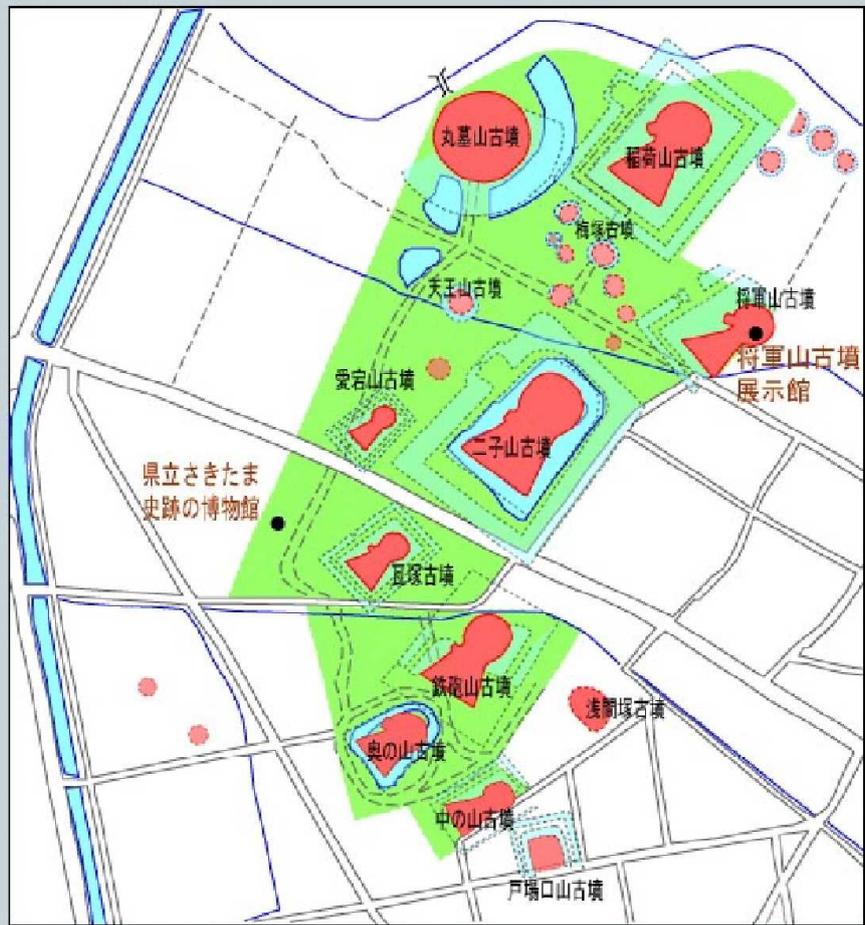
埼玉県行田市の埼玉古墳群には、かつて大小40基ほどの古墳が造られたことがわかっており、出土した遺物から5世紀後半から7世紀初め頃までの約150年間に次々と造られたと考えられています。

この古墳群の1基の稲荷山古墳から出土した金錯銘鉄剣の銘文の8代の氏族について、既に有益な内容の書籍もあると考えられるので、それらを踏まえて銘文の氏族を考察します。

2. 古墳群の築造順

古墳群には前方後円墳8基と円墳1基の大型古墳があり、この古墳群の築造順はほぼ、稲荷山→丸墓山（日本最大の円墳）→二子山→愛宕山→瓦塚→奥の山→鉄砲山→將軍山→中の山ではないかとされています。

さきたま古墳群配置図



ウェブサイト「北村さんちの遺跡めぐり」より転載

3. 銘文の内容

『稲荷山古墳出土鉄剣金象嵌銘概報』（埼玉県教育委員会編集、1979年）による銘文の表記は次のとおりです。

(表) 辛亥年七月中記乎獲居臣上祖名意富比埜其兒多加利足尼其兒名弓已加利獲居其兒名多加披次獲居其兒名多沙鬼獲居其兒名半弓比

(裏) 其兒名加差披余其兒名乎獲居臣世々為杖刀人首奉事来至今獲加多支鹵大王寺在斯鬼宮時吾左治天下令作此百練利刀記吾奉事根原也

また、上記概報による訓読は次のとおりです。

(表) 辛亥の年七月中、記す。ヲワケの臣。上祖、名はオホヒコ。其の兒、(名は) タカリのスクネ。其の兒、名はテヨカリワケ。其の兒、名はタカヒ (ハ) シワケ。其の兒、名はタサキワケ。其の兒、名はハテヒ。

(裏) 其の兒、名はカサヒ (ハ) ヨ。其の兒、名はヲワケの臣。世々、杖刀人の首と為り、奉事し来り今に至る。ワカタケ (キ) ル (ロ) の大王の寺、シキの宮に在る時、吾、天下を左治し、此の百練の利刀を作らしめ、吾が奉事の根原を記す也。

4. オホヒコからヲワケの臣までの8人の関係

銘文では「兒」で繋いでいるから8名は親子関係があるものと考え易いが、『日本古代系譜様式論』（義江明子、吉川弘文館、2000年）によれば、多数の事例からみて古代の地位継承は親子関係ではなくて政治的地位の継承次第を記したものではないかとの意見です。

それではオホヒコとヲワケの臣はどのような関係にあったのかですが、前川明久氏の「氏姓制への道」（『古代を考える 雄略天皇とその時代』、佐伯有清編、吉川弘文館、1988年に所収）によれば、阿倍・膳氏らの祖が、この時期にはすでに古い称号となっていた「ヒコ」に「大」の美称をつけて「大彦命」（意富比埜）という説話的人名を造作したとしている。

また、前川氏は前掲書で、乎獲居臣（直）が仕えた職務としての杖刀人は丈部の前身であるという説があり、これを統率したのは阿倍氏であったから、おそらく乎獲居臣（直）は阿倍氏の祖の配下にあったとみられ、葛城氏の系譜の「葛城襲津彦—葦田または玉田宿禰」の例から、「上祖名〇〇彦—其兒△△足尼（宿禰）」という系譜類型が5世紀中葉の宮廷か畿内豪族の間で成立していたとみて差支えなく、系譜類型のヒコにあたる人名に阿倍氏の祖のオホヒコを、スクネにあたる人名に自己のタカリにあてて「タカリのスクネ」とし、タカリ以下の自己の祖先名と実在の祖父—父—吾（ヲワケの臣）の系譜を結び付けて銘文系譜を述作したと考えられるとしており、なかなか鋭い考察です。

5. 名前のカリ、タカハシワケとハテヒ

銘文のタカリのスクネの**カリ**、テヨカリワケの**カリ**と膳臣の祖磐鹿六**雁**や『日本書紀』崇峻二年条の膳臣から分かれた宋人臣**雁**の**カリ**の部分の共通性については、『氏と家の古代史』（吉川敏子著、塙書房、2013年）などが指摘しているし、タカハシワケの**タカハシ**は膳臣から改姓した**高橋朝臣**と一致することは、『日本古代氏族系譜の成立』（溝口睦子著、学習院、1982年）が指摘しており、**ハテヒ**について吉川氏の前掲書では、『日本書紀』欽明六年条の膳臣巴提便をハテヒと読み、かつての一族に見られる名を用いた可能性を指摘しています。

銘文の8名と上記を含めた人名を表にまとめると次のようになる。

オホヒコ → 大彦	四道将軍の一人。(崇神九年条)
タカリのスクネ → 田雁足尼	
磐鹿六雁 (いわかむつかり) 命	大彦命の孫で膳臣の遠祖。(景行五十三年条)
テヨカリワケ → 千代雁別?	
タカヒ (ハ) シワケ → 高橋別	
タサキワケ → 田狭城別?	
ハテヒ → 巴提便?	
カサヒ (ハ) ヨ → ?	
膳臣 (稚桜部臣) 余磯	天皇に酒を献ずる。(履中三年条)
ヲワケの臣 → 乎別臣?	杖刀人首
膳臣斑鳩	任那日本府の将として高句麗と戦った。(雄略八年条)
膳臣巴提便 (ハスヒorハテヒ)	百済に派遣されて虎を退治する。(欽明六年条)
穴人臣雁	東海道の海辺の国を視察した。(崇峻二年条)
高橋朝臣乎具須比 (オグスヒ)	安曇氏と争論する。(高橋氏文 霊亀二年)
杖部造	孝元天皇皇子大彦命之後。(新撰姓氏録・右京皇別)

6. 名前のワケなど

銘文のテヨカリワケ、タカハシワケ、タサキワケ、ヲワケの4名がワケを称しているが、このワケとは「別」のことであるとするのは『日本古代国家の成立』(直木幸次郎著、講談社、1996年)が指摘しているところですが、筆者は『日本書紀』景行四年条に70あまりの御子が国や郡に封ぜられて各国に赴かれ、諸国の別というのは別王の子孫であるとの記述に関係しているのではないかと考えています。

つまり、『日本書紀』のこの記述はヤマト王権の婚姻政策により地方豪族と同盟関係を結んだことを示唆しているかもしれないからです。

江戸時代の子だくさんの11代将軍・徳川家斉には55名の子供(成長して縁組がおこなわれたのはその内の28人)がいたそうですが、景行天皇の70名はさすがに誇張かと思われ、『先代旧事本紀』天皇本紀の景行天皇の項には『日本書紀』の上記の記述に関連して合計25名の〇〇別命(尊)が出てきますが、銘文の4名は見当たりません。

『日本書紀』允恭四年条には誤って自分の姓を失う者もあるが、故意に高い氏を詐称する者があるとの記述があり、銘文の4名は詐称の可能性があるので、この一族はヤマト王権と何らかの関係があったものと考えます。

また、ヲワケの臣が称した杖刀人首は、『日本書紀』垂仁三十九年条の太刀佩部や『続日本紀』元明天皇慶雲四年条の授刀舎人と同様な役目を担った者かもしれません。

さらに、田雁足尼の足尼は『先代旧事本紀』天孫本紀で宇摩志麻治命が神武天皇の股肱の職にあり、天皇本紀では宇摩志麻治命が宮中に宿し近侍したことから足尼と号し、足尼の号はここから始まったと記しており、また足尼は奈良県斑鳩町の中宮寺が所蔵する天寿国繡帳や群馬県高崎市の山上碑に使用例があり、『続日本紀』光仁天皇宝亀四年五月条によれば足尼は宿禰の古い表記法であるとされているので、そのような事情から「足尼」の文字が使われたものと思われます。

なお、『新撰姓氏録』右京皇別には大彦命の後裔を称する杖部造(軍事的色彩の強い使部の伴造か?)の名が見えることから、ヲワケの臣と同族ではないかと見られます。

7. 鉄剣の贈り主

ヲワケの臣の祖父ハテヒと父のカサヒ(ハ)ヨはその名にワケを含んでいないが、前出

の前川氏によれば乎獲居臣（直）の家は杖刀人として仕えた祖父・父の代にはさしたる勲功がなく衰退していたが、乎獲居臣（直）の代になって、獲加多支鹵大王（雄略天皇）に対して杖刀人の首として軍事に精励したため、祖父・父の代の衰退を挽回し、大王から鉄剣を賞賜され、これに自己の祖先系譜を銘として刻むことを許されたのであろうとしています。

では、ヲワケの臣一族はいきなり杖刀人になれたのでしょうか。

やはり祖父・父がヤマト王権の関東地方の制圧に協力したので、その信頼を元にヲワケの臣は杖刀人からその首にまで登り詰めたと考えるのが素直ではないかと考えます。

そうしますと、鉄剣の賞賜と埼玉古墳群で最初に築造された稲荷山古墳は一連のもので、この古墳はヤマト王権と地方豪族との一定の支配関係の表現でもあるとする従来の考え方が適用可能なのかもしれませんが。

倭王武が南宋の皇帝に奉った上表文で、「東に毛人を征すること五十五国」とあるのは、北関東が毛野と呼ばれた地であることから、異論はあるものの五十五国とは関東地方のことで、ヲワケの臣一族が制圧に協力したと考えるのが妥当ではないでしょうか。

なお、大王がいた斯鬼宮とは栃木市藤岡町大前神社の住所が磯城宮であるので、この地の大王ではないかとする意見もあるが、確かに埼玉古墳群から利根川を挟んで直線距離で約20kmの近距離ではあるものの、膳臣の先祖が下毛野氏の配下であったとする記録は無く、雄略天皇が居住した泊瀬朝倉宮は当時の磯城地方に含まれるとの意見もあり、同じ磯城の地名が栃木市にあるとの理由だけでこの大王が雄略天皇では無い可能性があるとするのは相当無理がありそうです。

8. まとめ

『日本書紀』応神天皇十三年条の別伝に日向の諸県君牛は朝廷に仕えて老齢となり仕えをやめて本国に帰ったという話を載せており、ヲワケの臣も同じような事情にあった可能性が高く、稲荷山古墳出土鉄剣銘文の氏族について名乗りの観点から考察した結果、ヤマト王権と同盟、後に支配下にあった武蔵を本貫とする膳臣の先祖の一族である可能性は否定しがたいものと考えます。

前回の例会の内容

■ 「境連」と東鯤人の住処

名古屋市 石田泉城

「境連」の用語は「対象となる国との間に別の国を挟んだ状態」の際に使用され、「境連鯤壑」の意味は、三韓の境は倭に隔てられて鯤壑に連なる意味なので東鯤人の住む鯤壑は九州西南部以南から南西諸島を指す。

■ 鯤信仰と東鯤人

名古屋市 石田泉城

九州西南部や種子島には鯤信仰があり、東鯤人の住処を彷彿とさせる。

■ 古代南九州と東鯤人

一宮市 畑田寿一

鬼界カルデラ噴火で住むに不適となった南九州へ呉越戦争後大陸から海流に乗った避難民が移り住み独自の文化を形成した。

■ 壬申紀の誇張・改変から見えてくること

東海市 大島秀雄

加藤謙吉や篠川賢の研究では多氏や阿曇氏に関する記述に改変が見られるという。

年会費の納入

■ 年会費の納入について

- 1 年会費 5,000円
- 2 振込先

- ・金融機関：ゆうちょ銀行
- ・名称：古田史学の会・東海
- ・店名：二一八 店番：218
- ・口座：普通 1299395

例会の予定

■ 例会の予定

- 1 日時 6月20日(日)13時半～(第5集会室)
- 2 場所 名古屋市市政資料館

■ 来月以降の例会 7/18、8/15

会員の投稿について

- 会報誌への投稿 (編集担当：石田)
furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp
- 投稿締切り日 6月28日(月)